

ニューアンプランドは、はたしてカナタなのだろうか？ ひと夏、この島の首都セント・ジョーンズで暮らしながら、私は、しょっちゅうこの質問を自分に繰り返していたように思う。ニューアンプランドは島だから(ただし行政的にはその他のカナタのことを本土「メインランド」と称することになるのだが、島の人たちの本土に対する気持は、かなり複雑に屈折しているように思われた。わが北海道と本州のような関係だろうと思っただら大間違い。歴史的にいつても、ニューアンプランドが正式にカナタ国の一州になったのは、戦後の一九四九年のことであり、それまでカナタに帰属していた歴史もなく、また特別の親愛感をもっていたわけでもなかった。三十年前まで、カナタは、ニューアンプランドにとつて純然たる外国だった。アメリカと同程度に外国だったのである。一九四九年の選挙でカナタに加盟し、その一州になることが決まったのだが、この決定は島民の圧倒的支持を受けていたわけではなかった。カナタ加盟は僅少の差で決まったのである。カナタ加盟論の他に、独立を主張するもの、アメリカへの加盟を唱えるものなど、実際に世論のいろいろに分かれていたのである。カナタへの加盟後、長くニューアンプランド州首相をとめることになったジョーセフ(愛称「ジョーイー」・スモールウッド)の雄弁と政治力とがなかったら、一九四九年の島民の決定は別の形をとっ

ていたに違いない。もし、四九年にカナタ加盟派が敗れていたら、ニューアンプランドは、カナタの一州とならず、別の道を歩んでいたかもしれないのである。僅か数百セントの票の動き如何で、これは充分現実の事態となりうることだ。したがって、私たちがニューアンプランドのカナタ加盟の中に「本土復帰」的な民族の悲願や宿願を読みとったりしただけで済んでいいという気持ちなものはない。歴史的にいつても、後を決め手となったのは、経済的損得だけだ。たゞといつても過言でない。当然、本土(メインランド)といつても、そのことには帰属すべき母国といったようなえない。本土は、たんなる地理的呼称にすぎず、海峡の向こうのよその地といった感じが、いまでも強いのである。多くの特に年配のニューアンプランド島民にとって、自分の住む土地がカナタであり、自分がカナタ人であるということが、いままおぼつとこないらしい、という説明を私は何度か聞かされた。島に着いてから間もなく地元の日刊紙「イープリング・テレグラム」の投書欄を読んでいて「カ

ニューアンプランド あれこれ

平野敬一

ナタからやってくる外人たち「Foreigners from Canada」という表現に出くわし「びっくりしたことをおぼえている。年配者の投書らしかったが、カナタが外国であるという実感がまだ根深くこの島に残っていることを投書は示していた。カナタといつしよになつた歴史が浅いためまだ生じていない、ということになるら

また、地理的にいっても、ニューアンプランドと本土との距離は、相当のものがある。地図をひらいたら、この島がカナタの東の外れに位置していることは、だれにでも分かるが、現地にしばらく住んでみて、私はこの島の本土からの距離感、そこから生じる孤絶感、といったものが、はじめて実感として身にしみて分かつたような気がした。とにかく遠い。どこからも遠いのである。私はオタワからセント・ジョンズまで飛行機を利用したのだが、それでも正味七時間半の飛行時間だった。オタワから太平洋岸のバンクーバーまで五時間もあれば楽に飛べるのだから、これは随分遠いな、という実感だった。「地の果て」というと大げさだが、ニューアンプランド

特有の荒涼とした地肌を空からはじめてながめたとき、そんな表現がいつ頭に浮かんでくるのだ。ここからは、最密りのノバ・スコシアすら、けっして近くはない。

私は、この距離感に恐れをなしたわけではない。

飛行機の便もなかった一時代前のこの島の孤絶感、おそろしく想像を絶するものだったに違いない。

地理的孤立は、当然、島人のモヒリナイ(可動性)にも影響する。統計によると、島の住民の九五パーセント以上が島生まれだといふ。よそからの移住者がそれほど少ないのである。こういう人口構成は、北米社会では他に例をみない。もちろんでイナス面もあるだろうが、この特性から、この島特有のメンタリティ、風俗、言語表現、文学などが生じることになるのである。島で使用する英語も本土の英語と同一でない。文学作品も独自の世界を打ち立てている。現在、地元でニューアンプランド英語の辞書の編纂が進められているし、学生はニューアンプランド文学の講義を聴くことができるようになっていて。久しく絶えた無視と蔑視にもめげず、この島の島に新しい自己確認の気運が起こっているように私には感じられた。

(東京大学教授)